展望

鳩笛と夕陽

斉藤　梢

岩田正の第一歌集『靴音』を読む。昭和三十一年四月一〇日発行、定価一五〇円の一冊。

少年が売りつつ鳴らす鳩笛の街に平和な音をひびかす　『靴音』

街に売る鳩笛の音のやさしくて妻にきかすとひとつをもとむ

昭和二十二年から三十年までの作品が逆年順に並ぶ『靴音』には、その〈時代〉が残されている。一首目は「鳩笛」八首の始まりの歌であり、巻頭歌でもある。鳩笛を売る「少年」に、作者は社会と時代を見ているのだろう。平和の象徴である鳩をかたどった鳩笛の音が、夜の街にひびく。その音は、少年の命の音でもあり、少年は生きてゆくために鳩笛を売っている。少年が鳩笛を吹くという光景は、昭和三十五年生まれの私の記憶には無い。しかし、私は少年の息によって生まれる「平和な音」を想像する。そして、この「鳩笛の音」を無性に聞きたくなってしまう。歌によって知り得る〈時代〉があり、人々の営みがあり、心情がある。二首目の「妻にきかすと」には、妻への思いが表れていて、「ひとつ」を買う姿が見えるようだ。

日日母がきざみきたりし千六本手つき同じく妻がきざめり　『靴音』

千六本うまくきざみぬトントンとこんなよき朝われにあつたか　『郷心譜』

包丁の音はかろやかわが病めばわが俎は妻のまないた　『柿生坂』

『靴音』の後、〈評論の人〉となった岩田が、作歌を再開したのは昭和六十二年。第二歌集『郷心譜』の発行は平成四年である。包丁の音を捉える耳。「トントン」という俎のリズムは、母のものであり、妻のものであり、自身のものでもある。少年の命の音を「鳩笛」に聞いたように岩田は、母や妻、そして自らの命の音を俎に聞き、そして、その時の音を詠む。詠むことは〈時〉を残すことなのだ。平成三十年五月発行の『柿生坂』には、自身の老いを直視して、日々を生きようとする歌が並ぶ。軽やかな詠みぶりの三首目は、表面は明るく見えるが、「わが病めば」という現実から目をそらさない、ある日ある時の葛藤が詠み込まれていて、妻である馬場あき子との暮らしが残る。

こゑのみでひとのかなしさ知る茶房背中あはせの顔は見えねど　『泡も一途』

平成十七年発行の『泡も一途』のこの一首は、洞察の歌。顔は見えないけれども「こゑのみで」知る人の感情。映像的でありながらも、「こゑ」という感情の音を聞いている作者がいる。

純粋で真面目でありたいという私の願いの一端でも、歌の上に反映していれば、それで満足しなければならないと思う。私は自分自身の歌の今後に、一層の期待をかけたいと思う。そんな意味からも、最近の歌を巻頭に載せてみた。

『靴音』の「あとがき」に記した言葉には、平成二十九年十一月に九十三歳で亡くなるまで持ち続けた歌への厳しいまなざしと、心意気がすでに表出している。大正十三年に生まれ、昭和、平成を生きた岩田正の「明日の時代を招く靴音」。平和を願い、ブラームスを聴き、「歌の今後」を生き続けた岩田の詠む「令和」の〈時〉を、私は読みたかったと思う。純なる希求としての「切実」は、最後の声だったのだ。

足病んで冬をこもれば切実に夕陽を見たし夕陽浴びたし　『柿生坂』